

外国籍保育士の登用による成果

足利短期大学こども学科教授 佐々木 由美子

本稿は、多文化コミュニティである群馬県大泉町の保育園に勤務する外国籍保育士が、保育現場にどのような成果をもたらしたのか、事例をとおして紹介するものである。当事者として様々な経験をしてきた外国籍保育士が、過去の自分を重ね合わせることができる外国人児童に出会い、当事者の視点から支援をしてきたことが重要な意味を持つ。単なる通訳にとどまらず保育の知識や技術、更には文化や習慣に対する理解も有し、保育現場に常在して外国人児童やその保護者と関わることのできる外国籍保育士は、媒介機能を持つ保育士として重要な役割を担う存在である。

外国籍保育士を登用したことにより、外国人児童の保育園適応が促進し、外国人保護者の行事参加が促進されたと同時に、日本人保育士が改めて多文化共生保育に向き合う契機ともなった。その結果、保育現場に存在していた不安要素が取り除かれ、安心へと変化するとともに、これまでの「日本人化（小内 2003）」の保育から「多文化共生保育」へと変化してきたと考えられる。

1 大泉町の概要と多文化共生保育

群馬県大泉町は、1990年の「入国管理及び難民認定法」の改正を契機に、自治体主導で日系ブラジル人の受入を行った。それにより1990年以降、同町は外国人人口比率が常に全国一高い多文化コミュニティとして知られ、表1で示すように2019年12月末現在における外国人人口比率は約19%にも上る。かつて同町は外国人住民のほとんどを南米系日系人が占めていたが、現在では約50か国の国籍をもつ人々が生活し、かれらの背景も多様化してきている。

そのような中で浮き彫りとなってきた外国

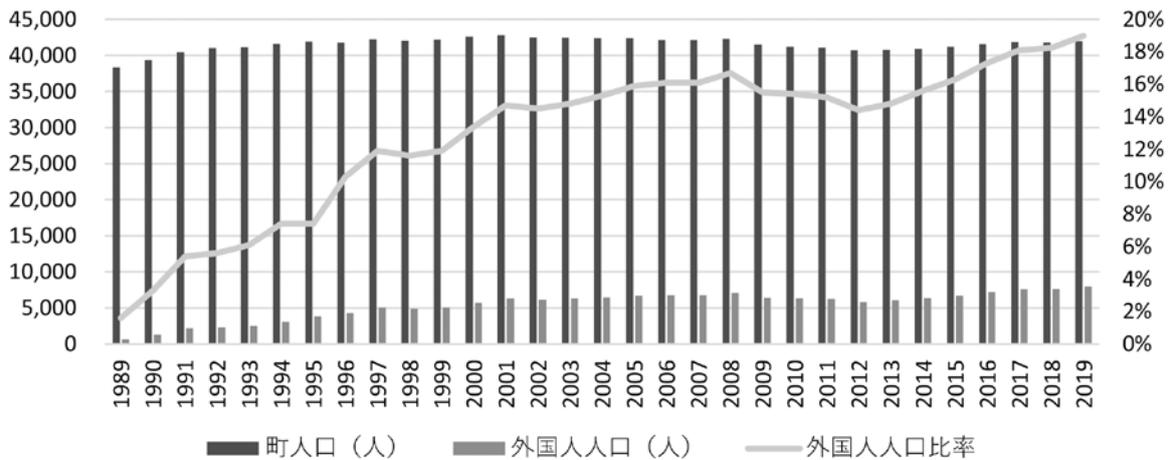
人児童とかれらを取り巻く環境の実態は、以下のとおりである。

外国人児童は保育園において、言葉が通じず精神的に不安定になりやすいという問題点がある。また、かれらの自己評価や自己肯定感は低く、社会情動的スキルの発達も阻害される傾向にある。

一方、外国人保護者の現状は不安定な収入による貧困、教育への無関心、ネグレクトなど複合的な問題が絡み合っている。また、外国人保護者は様々な情報にアクセスする術を持たず、情報不足に陥っていることも多い。

他方で保育者は、日常の業務が多忙である

図1 大泉町の外国人人口と人口比率の推移



出典：大泉町ホームページ「大泉町の人口・世帯」より筆者作成

こと、多数の外国人児童の在園が常態化していることから、あらためて多文化共生保育に向き合うことができない状況にあった。そのため、外国人児童に対して外国人であるがゆえの配慮をせず、日本人と同じ保育実践、いわゆる「日本人化」の保育を行っており、その実践方法が疑問視されていた（小内2003）。

2 外国籍保育士誕生とライフヒストリー

大泉町には、公立保育園が3園、私立保育園が3園、計6園の認可保育園が存在する。それらの園には人数にバラつきはあるものの、すべての園に外国人児童が通っている。そして、表1に示したように公立保育園に1名、同一の民間保育園に2名の外国籍保育士が勤務している。かれらは3名ともニューカマーの第2世代であり、児童期に来日して日本で教育を受けて、日本の保育士資格を取得している。

児童期に来日した外国籍保育士は、日本社会への戸惑いを経験している。日本語が理解できず、学習困難にも陥った。また、いじめ

表1 外国籍保育士の背景

保育士	来日時の年齢	ルーツがある国	採用年	勤務形態
A	12歳	ブラジル	2007	民間（正採用）
B	6歳	ペルー	2011	公立（臨時採用）
C	3歳	ブラジル	2013	民間（正採用）

出典：筆者作成

を受けたこともある。両親は日本語を理解できないので、そのような状況になったとしても頼れないと思っていた。日本語を学ぶ機会もなく、母語だけで話す両親と、日本語で話そうとする自分との間で、コミュニケーション障害が生じた。その結果、日本語ができない両親に不満を持つことになり、同時に同胞や母国に対しても嫌悪感を持ち、外国人である自分を否定する状況が生じた。

しかし、自分が成長して、子どもの頃の自分と同じ立場の子どもたちと関わったとき、通訳としての役割をとおして、自己効力感を得たのである。そして、当事者としての自分の役割に気づくことで、保育士としてのキャリア・アンカーを形成していった。

かれらが保育士をめざした動機は、コミュニケーションがうまくいかず、日本語が理解

できないことで不利になったり、叱られたりしている外国人児童との出会いである。外国籍保育士のキャリア・アンカーは、日本人のそれ「子どもが好き・誰かの役に立ちたい」に加えて、「母語ができる・母語で役に立ちたい」がある。このキャリア・アンカーの形成から、言語や文化の違いで困難を有する外国人児童や保護者の役に立ちたいと考えるようになり、苦勞して日本の保育士資格を取得したのである。

保育士として働き始めてからも、かれらは外国籍保育士ゆえの苦悩を経験することになる。保育現場が外国籍保育士の役割を、通訳・翻訳と捉えていたことで、かれらの負担が増加した。また、子どもと関わる機会が少なくなってしまうことで、自身のキャリア・アンカーとのズレによる葛藤を経験した。その結果、外国籍保育士 A は休職してブラジルへ、B は退職してペルーへと一時帰国することになった。

その後、A が不在になった園では、外国人児童やその保護者への対応をすべて A に任せていたことの問題点を改善することに取り組んだ。そして、外国籍保育士に対して通訳・翻訳をすべて任せるのではなく、「ピアノが得意な保育士」と同様に「通訳が得意な保育士」と捉えるようになった。また、B が再就職した保育園には、文化的背景が異なる外国籍保育士を理解し、協働していく環境があった。こうした経緯から、職場復帰した A、及び再就職した B とともに母語や母国の文化を生かした保育実践ができるようになったのである。

一方、A と同じ園に就職した外国籍保育

士 C は、A と比べて自分の母語能力が低いと感じ、再度ポルトガル語を学び直し、母国の文化も学んだ。そして、現在は園で多文化共生保育研修の講師を務めたり、母語や母国の文化を生かした保育実践に取り組むなど、その役割を果たしている。

3 外国籍保育士の保育実践

ここで、実際に外国籍保育士が行った保育実践について、外国籍保育士 B の例を用いて紹介する。なお、B は日本語と母語であるスペイン語、及びポルトガル語での会話が可能である。

B は、日本人保育士がいつでも活用できるよう、保育室に手作りのスペイン語・ポルトガル語の単語表を掲示した。単語にはカタカナでルビが振ってあり、日本人保育士が有効に活用するようになった。また、2 か月に 1 回発行される保育園新聞には、外国籍保育士のコラムが掲載された。その中では、簡単なスペイン語やポルトガル語、及びペルーやブラジルの文化・習慣などについての紹介を、日本人保護者に向けても発信した。更に、行事の際には、積極的に通訳として外国人保護者に寄り添い、外国人保護者が楽しく行事に参加できるよう働きかけた。

以下に、3 歳で入園した外国人児童 G と外国籍保育士 B の関りについての具体的なエピソードを紹介する。

(1) 午睡

Gが入園して7日目の朝、登園時の場面である。

エピソード1

母親と一緒に登園したGが玄関先で、母と大声でやり取りをしていた。母が困惑した様子でGをなだめると、納得したのかGは保育室へ走って入っていった。母は日本語がほとんど理解できないため、外国籍保育士が事情を聞き取った。

Gには午睡をする習慣がなく、前日の午睡の時間がとても苦痛だったので、今日からは昼食が終わったらすぐに迎えに来てほしいと訴えていたという。そして、その日は昼食後に迎えにくると約束したので早退する、ということだった。母は午睡の必要性に疑問を持っていた。そこで、外国籍保育士は、午睡は集団生活による緊張を緩和し、心身の疲れを癒すものであること、また無理に寝かすのではなく、休息の時間であることなどを母に丁寧に説明した。

帰宅後母は、Gに午睡の意味を「大きくなって、元気になるため」と話したとのことである。翌日の午睡の時間、Gはなかなか入眠できなかったが静かに横になって午睡の時間を過ごした。その後、Gが午睡の時間を嫌がることはなくなった。

ブラジルには、日本の保育園で行っているような、集団での午睡という習慣はないという。この場面では、外国籍保育士がGの母と日本人保育士間の媒介者として機能してい

る。この対応において、外国籍保育士は単なる通訳者としての役割ではなく、保育者としての役割も果たしている。それは、外国籍保育士が単に通訳をただけではなく、自ら保育における午睡の意味を適切にGの母に伝えたということである。

(2) 外国籍保育士との出会い

Gが入園して17日目の自由保育における外遊びの時間である。

エピソード2

Gは、入園直後はポルトガル語で日本人保育士に話しかけていたが、数日するとまったく言葉を話さず、指差しやジェスチャーで意思表示をするようになった。

Gが一人で遊んでいると、外国籍保育士がGにポルトガル語で「何しているの?」と問いかけた。するとGは非常に驚いた表情で「ぼくのことがわかるの?」と答えた。

Gが言葉を発せず、ジェスチャーや指さし行動によりコミュニケーションを取ろうとしていたのは、入園から10日以上が経過する中で、日本人保育士に自身の言葉が通じないということを認知していたからだということになる。そして、自分の意思を伝えるためには、ジェスチャーが有効な手段であることを感じ取っていた。

そのような中で、外国籍保育士との出会いである。この場面におけるGの「ぼくのことがわかるの?」という言葉は「僕の言葉が理解できるのか?」という意味でもあるこ

とが推察される。また、「僕を認めてくれるの？」という意味を含んでいたのかもしれない。保育園に自分の言葉や自分の存在を理解してくれる保育士がいるのだということに非常に驚くと同時に、安心感を得たのではないかと、その表情からうかがえた。

(3) お片づけ

入園から約1か月が過ぎた自由保育の時間である。帰り支度をする時間になり日本人保育士から「お片づけして、お部屋に入りなさい」と声かけがあった後の場面である。

エピソード3

一緒に遊んでいた外国人児童は、おもちゃを片づけて部屋に向かった。しかし、Gは、そのまましばらく1人遊んでいた。それに気づいた外国籍保育士は、Gに「お片づけというのは、おもちゃ遊びを終わりにして、元のところに返すことだよ」と「お片づけ」の意味を母語で説明した。更に、「やることがわからない時は、お友達がしていることをよく見て、同じようにするといいよ。わからないことがあったら、いつでも私に聞いてね」と付け加えた。すると、Gは外国籍保育士の言葉を真剣な表情で聞いて、「わかった」と言ってにっこり笑い、おもちゃを片づけて走って部屋に戻った。

この場面における外国籍保育士の声かけは、単に言葉の意味を伝えるという通訳の機能だけではなく、Gがどう行動して良いかわからなかったときの対処法を伝えるという機

能も有していた。そして言葉を理解できる保育士が側に存在しており、困ったときにはいつでも受け止めるというメッセージも発信していることがうかがえる。

4 外国籍保育士の実践がもたらした成果

言葉が通じなければ、外国人児童及びその保護者が他者とコミュニケーションをとれないというわけではない。しかし、お互いの意思疎通を容易なものにするためには、言葉が重要なツールの1つとなる。そして、日浦(2002)が述べているように、言語コミュニケーションの障害が外国人児童の情緒の不安定を引き起こすということを考慮すると、母語で意思疎通が可能な外国籍保育士の支援は、外国人児童に情緒の安定をもたらすと示唆される。

中川(2005)は、通訳が常在の場合は、外国人児童の思いや訴えがわかり、保護者からも信頼されていると述べ、派遣の通訳の場合は、相手の気持ちがわからず保護者から信頼が得られないと述べている。このことから、単なる通訳にとどまらず保育の知識や技術、更には文化や習慣に対する理解も有している外国籍保育士は、多文化共生保育において重要な役割を担う存在といえるであろう。

また、外国籍保育士による支援が就学前の外国人児童にとって非常に大切な母語を維持し、同時に主要言語である日本語の習得を促すことにもつながっていると考えられる。その結果、外国人児童が母語や母国文化に負い目を感じることなくアイデンティティを形成し、その中で自身の持つ能力と資質を開花させていくことが可能になるのではないだろうか。

これまで述べてきたように、外国籍保育士は日本人保育士や日本人保護者及び日本人児童に対しては、言葉や外国文化を紹介し普及している。外国人児童及び保護者には、母語でコミュニケーションがとれるという安心感を与えると同時に、代弁者ともなっている。更に、外国人保護者が、保育園行事に楽しんで参加できるようになり、日本人保護者と交流する機会の増加にも貢献していると捉えられる。また、日本人保育士が外国語や文化を学び活用するようにもなったのである。

したがって、こうした外国籍保育士の実践により、日本人化の保育の中に存在した不安要素が取り除かれ、すべての子どもと保護者、及び保育士が安心できる多文化共生保育へと変遷してきたといえよう。

引用文献

- 小内透編著『在日ブラジル人の教育と保育 群馬県太田・大泉地区を事例として』明石書店（2003）
- 日浦直美「多文化共生社会の保育（1）保育者が感じる子育て文化の違い」聖和大学論集 A、教育学系 第30巻（2002）pp. 11-24
- 中川美子「外国人の子どもの保育に関する調査」愛知県立大学文学部論集、社会福祉学科編 第54巻（2005）pp.45-81